

本との出会い 自分との出会い

大内 雅 浩 (助教 マクロ経済学)

歴史小説が好きだった私は、進学で東京に出てきて間もないある日、安く本を買おうと慣れない電車や地下鉄を乗り継いで恐る恐る日大経済学部近くの神保町に来たことをこの機会に思い出した。御存じの新入生も多くいるだろう。経済学部がある銀杏並木の白山通りを靖国通り方面に5分ほど歩くと、夏目漱石、宮沢賢治、司馬遼太郎などの多くの作家も通った世界随一と言われる神田神保町の本屋街が見えてくる。昨年の暮れに閉店した巖松堂のような老舗も残念ながらあるが、現在180店舗もの古書店が神保町界隈に点在しているそうだ。今のようなインターネット時代ではなかったから古本と言えばここしか思い浮かばなかった。引き戸を開けなければ入れない小さな古書店では、奥の方にちらりと見える店主を見ては冷やかしになるかもしれないと、せっかく来たのに入ることを躊躇^{ためら}ってしまう店もあった。皆さんは、わずか数分で好きな文学や学問にふれる楽しさを日常的に経験できるすばらしい周辺環境にいる。

新入生の中には、大学時代にどんな本を読めばいいかと思ひあぐねる学生もいるだろう。書店には、「何歳までに読むべき本」のような、著名人らの薦めるリーディング・リストが載るハウツー本があり、就活中の学生やサラリーマンにもよく売れているそうだ。硬派なものでは、例えば、数々の経済小説を執筆している城山三郎氏らによる『人生に二度読む本』（講談社）がある。そういうのも参考にできる。本に明るい友人や先生、図書館の司書の方に訊いてみるのもいい。ネット上でも読書家らが集うサイトがあり、各人がソムリエ風に思い思いの魅力を語っているので自分の感想と比較できて面白い。このように面白そうな本は探せばいくらでもある。

でも、本との「偶然の出会い」も私はとても楽しい。その格好の場を提

供してくれるのが図書館だ。なんたってただなのだから気軽に借りられる。読書を習慣にする学生には必要ない話で恐縮だが、講義の合間にでも図書館に足を運んでみて館内の本をゆっくり見て回ってみれば、自然と気になった本を手にとっている『自分』に出会えるはずだ。図書館はハタキを持って咳き込む主人を無駄に妄想しなくていいから、本をパラパラとめくっては、文体や雰囲気といった視点でいいから本を自分の感覚で選んでみる。いろんな未体験ジャンルの存在も知ることができて自分の興味の対象を新たに発見し広げることができるから面白い。もちろん、経済学の古典や専門書にもチャレンジする『自分』にもきっと出会えるだろう。どんどん背伸びをして自己成長していく自分に自信がつくはずだ。「大切なことは自分の興味を自分で知ること」だと、ムーミンで知られるトーベ・ヤンソンは言う。私は図書館の空間そのものも好きだ。古今東西の知恵の集積空間にいると贅沢だと思うし、その知恵を創造した仕事にたいして謙虚になるからだ。

本の中には、終には面白く感じずに閉じてしまうこともよくある。でも、時が過ぎてから、読んだ本も諦めた本も、また手に取ってみるのも面白い。自分の感性や知識の「変化」や「成長」を発見し、新たな『自分』に出会えるからだ。自分流の『人生に二度読む本』ができあがっていくだろう。大学時代に多くの本と出会ってほしい。

本は「生きる力」になる。皆さんには、大学図書館で学生時代にしか経験できない特別な時間も過ごし、ときには、本を片手に花時の賑わいも落ちついてきた神保町・千鳥ヶ淵界隈を散策したり神保町名物の数々のカレーを試したりして、いろんな学生生活を楽しんでほしい。文学男子、文学女子の大学生活もいいのではないだろうか。